

み、うそのない生活をすることを希望していたのでしよう。

戦後、静岡県東部から代議士になった、久保田豊さんから、「仕事を見つけたので、行ってみないか」と何度か手紙をいただきましたが、父は「私は、就職する気はありません」と返事をしていました。また、「中国語辞典をまとめてみないか」と、出版社の知人が大きな包みを二つも送ってきました。原稿用紙でしたが、項目を書き出しただけで、まとめることはできませんでした。

父の求道生活は理解しても、私は、見通しのない農業生活には、ついて行けません。旧制中学の三年生だけでなくも三度も経験したのです。父の反対を押し切って熱海高校に編入学しました。しかし、授業料も、諸会費も未納の状態でした。「これで、ここも退学か」と思ったときに、同校教諭の佐藤ます先生が、私の身柄を引取り、その後は、先生のおかげで学生生活を続けることができました。佐藤先生が、父を訪ねてきて我が家を見て、「こんなに貧乏とは思わなかった」と、

涙を流されました。

父は、満州国の役人生活を通して、満州国を見つめ、孤児院、救済院、満人の開拓村である立正村まで作りしましたが、理想を果たすことはできず、また、帰ってきてからも失敗しました。そして、昭和三十五年八月、五十八歳でその生涯を閉じました。

父は、自分の考えを押し通してきたのですが、私には、真似のできない生き方でした。

## 軍属三カ月で流浪の旅へ

奈良県 森川 巳三

私は昭和四年三月二十五日に、大阪府堺市で父寿一、母こむめの長男として生まれました。姉と二人姉弟でしたが、私が七歳のときに父が病気で死亡したので、母と共に大阪市の山ノ下町に移って育った。そこで小学校を終えて市立の機械養成所に入り無事に卒業した。

卒業と同時に地元の鉄工所に就職したが、鉄工所勤めはあまり好きではなかった。当時は戦時下であり、若者は皆、お国のためという事で陸海軍に入ってしまった。私もその空気に刺激されていて、もっと男らしい仕事がしたくて、当時募集していた関東軍の軍属を志願した。

母に知れたら当然に反対されると思い、黙って願書を出して採用試験を受けた。その結果首尾よく合格した。十六歳だった。

反対する母や姉をやっと説き伏せて、昭和二十年六月上旬に勇躍として満州に渡り、奉天の第九一八部隊に着任した。そして一緒に行った同僚四十二人と共に、東塔飛行場の警戒の任についた。

八月十五日正午のラジオ放送は、雑音が多くて不明瞭だったが、時々聞こえる大皇陛下のお言葉と、周囲の雰囲気から重大な変化であることを察知した。

数日後、険悪な状況のもとにトラックに乗って原隊に復帰したものの、毎日ソ連軍での使役に明け暮れていた。いろいろと飛び交う情報から、軍人と共にシベ

リアに連行されるらしいとのうわさで、一同大いに悩んでいた。

同僚仲間と相談して、全員でここから脱出をすることを決意した。この決意を部隊長の中村元晴大佐に申し出たところ、中村大佐は即座に「諸君の軍属としての身分を解除する」と言われて、部隊員一同の見送りを受けて営門を出た。時は、九月五日の夕暮れであった。

一同は一団となって、奉天に向かうことにした。しかし、営門を出てわずか数時間後、ある部落に差し加かったので、そこを静かに通過しようとしたが、部落民に発見され長柄の大鎌を振り回す集団に襲われ、携行していた物品のほとんどを強奪されてしまった。

そうなるともう野宿するほかなかった。部落を過ぎながらトウモロコシ畑の中で野宿し、一同でこれからの行動について相談した結果、全員一団となって行動するのをやめて、五、六人ずつの小集団に別れて行動し、奉天駅で落ち合うことを申し合わせた。

私は、六人組の中に入って奉天に向かって歩き出し

た。途中の行動も容易ではなかったが、やっと六人そろって奉天駅に着いた時、そこで生き地獄さながらの光景を見た。

駅構内から駅前広場まで避難民の老人や婦女子であふれている。人々の顔は不気味なほど無表情であった。遠い北滿や東西の国境地帯から苦勞に苦勞を重ねて、やっとここにたどり着いた開拓団員や、その家族であろうか。むしろや麻袋を体に巻きつけただけで裸に近い格好の女性の姿も見受けられた。また、子供たちは涙も枯れ果てたかのように、ぐったりとしてうつろな眼差しをしている有様であった。

何か異変でも起きたのか、途中で別れた総勢三十六人の数グループの仲間が一人も姿を現さない。心配になってあちらこちらと捜し回ったが会えず、情報もなかった。心配は募るばかりであったが致し方なかった。ここで二日が過ぎた。

三日目になり、南へ行く列車が出るとのことで、これに乗らなければいつまた列車が出るのか分からないと考へ、六人で相談してなんとかこの列車に乗ろうと

決心した。避難民をかき分け、かき分けながらホームにたどり着いた。

それから悲劇が起こった。ひしめく避難民の群れにソ連兵がマンドリン銃を振りかざしながら近寄ってきて、手当たり次第に腕時計や万年筆などめぼしい物の強奪を始めた。

私たち六人は同じ車両に乗ったけれども、車内では離ればなれになってしまった。中ほどに四人、出入口付近に二人となつてしまい動きがとれない状態となつたが、間もなくして列車が動き始めて内心ホッとしていた。

そのうちに出入口付近が騒がしくなってきた。刃物を振りかざした数人の暴徒が、乗客に対する略奪を始めたのだ。これに対して三人の日本人の若者が猛烈と反撃に出たのだ。よく見るとなんとそのうちの二人は、一緒の仲間である。猛烈に抵抗しても相手は刃物を持っており、こちらは素手なので次々に刺されて倒され、デッキに引きずられて車外に突き落とされてしまった。車内には多数の兵隊だったらしい者もいた

が、だれ一人として手助けをすることができず、情けない有様であった。

そのうちに暴徒は、段々と車内の中ほどに進んできて私たち四人の立っているところに来た。私たちに對しては、さっきの仲間だろうと思つたのか、特に憎しみの目を向けてきた。私たちの着ている上着やズボンなどを乱暴にはぎとり、靴、靴下までも強奪していった。刃物を振りかざすので抵抗しようにも危険なので、できなかつた。ここで命を落したり、大けがでもしたら帰国できなくなるので、我慢に我慢をした。

結局、ふんどし一つだけの情けない姿になつてしまつた。しかし私は、ふんどしのひもに五十円札一枚を細くよつて巻き込んでいたので、それだけは取られずに助かつた。この五十円札一枚がそれからの四人の飢えをしばらく満たす資となつた。

宮の原駅に列車が止まると、ホームで婦人団体の人々が湯茶の接待や、病人の手当てをしていたので、その場に行つて車内での事情を話すと、収容所に伴わ

れてそこに一時収容された。古い物だったが上着、ズボン、靴などを与えられてやつと外を歩けるようになった。

その収容所では、コンクリートの床に、ござやむしろを敷いて、虚脱状態となつた避難民や病人が座つていたり、横たわつていたりした。

町へ出ても仕事は無かつた。数日後、ソ連軍の軍用列車が宮の原駅に止まっているのを見たので、機関車に近づくると日本人の運転士であつた。行き先を聞くと安東方面だと言うので、私たちは必死になつて便乗を頼んだ。最初はいろいろと理屈を言つて断り続けていたが、とうとう根負けして「石炭車に潜り込め」と言つて、乗車することを洩々承知した。そして「頭を絶対に上げるな！ もしもソ連兵に発見されたら命の保証はないぞ！」と念を押された。ソ連兵の目からかばつてくれるためだつた。

収容所で世話になつた人たちに、お礼も言わずに急に姿を消した格好になり、不義理に気がとがめたが致し方なく、収容所の方に向かつて頭を下げた。

夕刻になって無事安東駅に到着した。機関車、石炭車はしばらくして貨物列車から切り離されて、機関庫内に向かった。機関区の手前で止まり、運転士から、「ここで降りろ、早く街へ潜り込め！」と声がかかり、お礼の言葉もそこそこに人込みの中に紛れ込んでいった。成功だった。

あとは鴨緑江を渡って、朝鮮半島を縦断して釜山まで行き、船に乗れば日本だ。もうすぐ故国に帰れるのだ。勇気が自然とわいてきて、足取りも軽くなった。何か安心感も漂ってきた。もうすぐ日本だ！ しかし世の中はそんなに甘くはなかった。

鴨緑江上の鉄橋は、九月二日をもってソ連軍が閉鎖をした。行く手を阻まれた多くの避難民がたむろしており、学校、寺院などにも収容しきれずに、安東市在住の邦人宅に入れられて生活をしているそうだ。寒さを前にして恐れおののく群れといってもいいような有様であった。

ここまでどうにか来たものの、四人は持ち金もなくなり、雨露をしのげる場所を求めてさまよい歩いた。

市街から四キロメートルぐらい歩いたであろうか、小さな山（後になって兜山という名であることを知った）の近くに廃屋とも思えるような小屋を発見した。

ここを当分の間のねぐらとすることとした。拾った鉄兜を洗って鍋とし、近くの畑からトウモロコシや野菜などを取ってきて雑炊のような物をつくり腹を満たした。

山に登ると鴨緑江の滔々たる流れが目の前に見え、対岸には北朝鮮の連峰が望めた。その先はるかなる祖国、日本に思いをはせた。

何か仕事がないかと歩き回るが、体力の消耗の方がはなはだしく、いったん街に出ると四キロメートルも離れた小屋にはもう戻る気力が無くなり、街中のガード下で、体を寄せ合って野宿することもあった。時は既に十月で、満鮮国境地帯はもう風が冷たくて眠れたものではなかった。

だれの世話だったか忘れたが、二番通りの小さいアパートの二階一室に入ることができて、風雨を防ぎ畳の上で休むことができるようになった。

だが、最初の夜にアパートの前の道路を人が騒々しく走り回り、拳銃の乱射があつて部屋の窓にも流れ弾が当たつた。

当時、安東市内は中共軍が押さえていたが、その統治に対して不満をもつた者が国民党の工作員と組んで、かく乱を謀り事ごとに対立しており、その騒動と後で分かつた。私らは中共であろうが、国民党であろうが、どちらでもよかつた。ただ、早く帰国したいだけなのだ。

仕事を四人一緒でということを探すのは無理で、別々に分かれて各人が行動することとした。私は沙河鎮駅近くまで行き、小工場をのぞいたら旋盤とボール盤が各一台あつて、その主人が一人で仕事をしていたので、「働かせてほしい」と言ったら、「旋盤を扱つてみる」とのことだったので、バイト（刈物）研ぎを動かした。私は工業学校機械科卒だからお手の物だった。食事もついたので喜んで数日通つた。日本語も分かる人で、「ここに住み込んで働け」と言っていた。また、「日本に帰っても大変だから中国で永住したら

どうか？」とも勧められる始末であつた。でも私には、大阪で母親が待つていたので、そのような気持ちには到底なれないので残念だったが、そこで働くのをやめた。

その後私たちは、そろつて「安東西本願寺」の大きな塀の中に入った。そこでは本堂ばかりか、庫裏までも避難民でいっぱいそれぞれ自炊をしていた。御輪番様にも会えて今までの事情を述べると、食事を与えられ一泊して行けということになった。

綿の布団で寝るのは、渡満して以来初めてのことで、手や足を十分に伸ばして休むことができた。

ところが、夜半過ぎから私は高熱を出した。翌朝、私たちは礼を述べに御輪番様のところに伺つた。仲間にも腕を支えられている私を見て御輪番様は、「その体で今ここを出るのは無理だ。回復するまでここにとどまるように」とおっしゃつた。四十数度の高熱と意識混とんとした数日が続いたが、お寺様の手厚い看護を受けて日に日に回復し救われた。

どうにか体力も元に戻つたところ、大福餅製造と卸販

売の仕事を紹介されてお寺を出た。十一月になつて  
いた。

仕事の場所は花園街にある満鉄社宅に住んでいる松  
尾政宗さんの家であった。そこに移り住み込んだ。同  
じく住み込んでいた開拓団から避難してきた母子たち  
と一緒に作業だった。おかげさまで昭和二十年の暮れ  
をなんとか越すことができた。西本願寺で別れた三人  
は、それぞれに別れ散って連絡がとれなかった。

昭和二十一年四月になると、街では引揚げ近しい  
うらわさも流れて希望を持って仕事に精を出していた  
ところ、何たることか国・共衝突のあおりを受けて、  
看護婦要員とか、担架隊員とか、塹壕掘りの男子要員  
とかの徴集が始まった。私は鉄道建設隊員として徴集  
された。

無蓋貨車に多くの若者が積み込まれ、鳳凰城駅から  
支線で約八十キロメートルも行ったところの灌水駅で  
降ろされた。そこから約二十九キロメートル行ったと  
ころの寛甸までの間の鉄道建設を仕上げるのが仕事  
であった。すでに工事の一部は終戦前に満鉄で着手さ

れていた。完成の期限は八月末とのことであり、五月  
初旬から着工したのは、相当な難工事だと思つた。

路床際に造つた掘つ立て小屋は、アンペラ敷きであ  
つてそこで寝起きをした。主作業は二人一組となつて  
の土砂運搬で、作業にはノルマがあつてそれを達成し  
ないと、その分だけわずかしかもらえない手当金から  
差し引かれるのであつた。

食事は、野菜が少し浮いている塩汁に高粱か粟の飯  
であつた。虱や蚊が多くて不衛生極まりない生活で、  
悪環境と栄養不足から病人が多発したが、医者は不在  
だし薬は無く、患者は自然治癒か、死を待つただけであ  
つた。

結局、工事はやむを得ず一カ月延長となつた。

そんなときに、私にとっては幸運が訪れたのであ  
る。それは安東でお世話になつた大福餅製造の松尾さ  
んたち四人が技術者としてここに来たことである。

私は、本部との連絡要員が必要ということ、その  
要員に指名されて特別待遇の宿舎に移つたのである。  
栄養のある物を十分に食べて、仕事は今までから比べ

ると比較にならないくらいに楽で、みるみるうちに体力は回復した。

この時期、国・共両軍が、連山開墾天嶺地域で激しくぶつかり合っていたが、圧倒的な物量を持った国府軍が中共軍を押しまくっていた。中共軍は利あらずに、たくさん死傷者を出したので、その収容に担架隊として駆り出された同輩は、最前線に身をさらしながら危険な仕事をしていた。急降下で機銃掃射をする国府軍戦闘機により、少なからざる被害者を出した。

撤退する中共軍は、破竹の勢いの国府軍に追われて、とうとう十一月の初めごろには、満鮮国境の拉古硝まで追い詰められてしまった。私たちは一刻の猶予もないままに、中共の兵士とともに対岸の水豊に渡った。

渡河中の船に対して国府軍は猛然と銃弾を浴びせた。六百メートルも河幅があり、乾いた空気のみ空に弾道の光線が鮮やかにさえていた。相当な犠牲者も出て、惨たんたる有様であった。

中共軍は、翌朝早く上流から再渡河をして反撃をす

ると告げてきたが、うなずく者は無く、三々五々と首を垂れながら歩いており、生きた心地がなかった。

そのとき私たちのそばに朝鮮人が寄ってきて、「水豊ダムの日本人抑留技術者に相談して、ここから逃げろ」とささやいた。周囲にいた十四、五人がその言葉に従った。

水豊ダムに抑留されていた日本人技術者のところに行った。今日までの事情を話してどうしてもここから南に向かつて行き、日本に帰りたいたいという決心を話し相談したところ、技術者は次のように助言した。「北朝鮮では反日感情が強いので、できるだけ人目を避けて夜間行動をし、昼間は身を隠して動かないようにする」「もしも保安隊や北朝鮮人に出会ったら刺激を与えるような言動をとらないようにする」「朝鮮半島は南北に分断されており、南は韓国となっている。その境界の三十八度線までは、ここから直線距離にしても約三百キロメートル以上もある。危険の際の対応を十分考えておくこと」などであった。

そして、必要不可欠な道中における経費の足しに

と、一人当たり朝鮮銀行券で五百円もの大金を与えてくれた。ほとんど所持金がなかったので涙が出るほどうれしかった。

十二月近くになると北朝鮮の気温は低くなり、防寒具の無い者にとっては限界ぎりぎりの寒さであった。

昼は日だまりに体を寄せ合って肌のぬくもりを保ちながら眠った。夜は一層寒気が下り、歩いていても寒さがひしひしと身にこたえた。狼の遠吠えが恐怖心をいやがうえにも苛立たせた。

幾つかの山を越えて、日教も忘れかけたところに、ある部落地帯に出た。そのとたんに銃を持った数人の現住民に捕らえられて、保安隊に連行され尋問された。

「どこに行くのか?」「内地へ、徒歩で帰る途中だ!」と答えたところ、「内地に?」お前らは内地、内地と言うが、内地、外地とまだ朝鮮を植民地扱いにしているのか!」と、怒鳴られた。

壁には、「日本語を使うな」とか、「北朝鮮独立万歳」などの紙があった。

結局、その晩は留置場に分散して入れられた。身体

検査があって、今日までの行動とかいろいろな必要事項を書いた覚書のメモを取り上げられた。また、みんなは乞食のような姿なのに大金を持っていたことを怪しんだけれども、理由を話したら没収することをしなかった。このことはこれからの行動に大変助けになりほっとした。

翌朝、無事に釈放されて南下を続けたが、道中至る所で、すれ違う住民からは罵声を浴びたし、女子供からはつばを吐きかけられたことも幾度かあった。

長い道のりを一カ月ほど歩き通した。ようやく三十八度線を目前にし、感慨無量な気持ちだった。

ここに来るまでには、善意を持って接してくれた中国人、朝鮮人もかなりいて、ありがたい思いもした。敗残の汚い身なりの者に対しての言動には人間さまさまであることを、しみじみと身にしみて知ったものであった。

ここからは、地名を示す表示板があるわけではないので、ただ南の方に向かって歩くだけだった。しばらく歩いたところ、鉄道の踏切のような遮断機が見え、そ

のそばにソ連軍の警備詰所があった。

さて、どうするか？ 出頭して通行許可を受けるか、もしくは迂回して山中を突破するか、とみんなで相談した。いろいろと考えた結果、一同は前者を選んで、遮断機のある方に向かって歩いた。

ソ連兵にとがめられて身体検査をされた。検査は厳重であった。元軍人や官吏、特に憲兵とか警察官とかを調査するのが目的らしかった。通訳の朝鮮人もわりに好意的だった。

警備兵は遮断棒を上げて「早く行け」とばかりに顎をしゃくって合図した。

それから、また歩き続けた。しばらくすると山がありそれを越えて、さらに歩き続けた。どれくらい歩いているのか分からない、ただ早く南の端まで行きたいという気持ちだけだった。

前方から米軍のジープとトラックが、こちらに向かって走ってきた。山の背で米軍とソ連軍の警備担当が区分されているのか、今度は米軍だった。思わず逃げ出したが、すぐに捕まって全員集められてしまった。

トラックに乗せられて、たばこやあめなどを勧められているうちに、開城日本人会のテントに着き、日本人会に引き渡された。

事情を調べられた後、若者組と壮年組とに分けられて収容テントに入った。私は若者の組で六人が一緒だった。食事は体を調整するために軟らかい物から出されて次第に米の飯になった。

数日後に、六人は列車に乗せられて京城に向かったが、なぜか壮年組になった八人の姿は見受けられなかった。京城駅では、京城日本人世話会の人たちが出迎えてくれて、丘の上の収容所に入れられた。数日をそこで過ごした。

やっと安どの念が沸き、気持ちも落ち着いてきた。気持ちが落ち着くと大阪の母のことが思い出された。どうしているのか、空襲があつて大阪も全部焼けてしまったとか聞いていたが、まさか空襲で焼け死んではないのだろうか。次から次と考えると一日も早く日本に帰りたいという気持ちでいっぱいになってきた。

数日後、釜山に向かった。

広がる青海原、特有の潮の香りに心が高ぶった。岸壁に並ぶ倉庫に收容された。

そこで、ごく数組だったが現地在住の家族らしい人たちが、たくさんの荷物に囲まれて、新しい衣服などで着飾った格好をしていた。いろいろと食べ物なども買い込んで酒盛りを繰り広げていた。一方では、着たきりすずめの避難民たちが、配給された高粱飯を大事そうに口へ運んでいるというのに。また、人によっては骨箱らしい物を抱えて、うなだれている女性もいたが、その対象ぶりは非情なものだった。

我々若者のところに、物持ちの男が寄ってきて「荷物一個を持ってくれ、上陸したらすぐに引き換えに三百円渡すから、どうだ」と、話を持ちかけてきた。応ずる者は少なかった。

五日間ほど收容所にて生活をした後、昭和二十一年十二月十日に米軍貨車の大きな上陸用舟艇（当時LS Tと言っていた）に乗り込んだが、舷側に並んで出迎えてくれた係官から、「御苦労さまでした。船内はもう日本ですよ」というねぎらいの声がかけられた。そ

れを聞いて全身から何かしら力が抜けるような気がしてきた。

玄界灘は荒れていた。船室ではみんな船酔いで寝転がっている。しかし、もうすぐ日本の土を踏めるところと、船内特有の悪臭にも耐えていた。

夜には、乗務員たちによる慰労会が開催されて出席した。「リンゴの歌」、甘い歌詞にうなずき明るい気分になったり、引揚者の婦人が、「だれか故郷を思わざる」を歌い、それに和して涙を流した。

翌朝早く、「おーい、日本が見えるぞー」の声に船内は沸き返った。人々は肩をたたき合い、抱き合っていて歓喜していたが、いつの間にか涙と嗚咽に変わっていた。

船は佐世保湾に入って投錨した。伝染病にかかっている人がいなかったのが幸いで、翌日には佐世保港の岸壁に接岸した。

十二日には上陸開始となり、上陸してその場で頭から背中、腹に至るまでDDTの散布による消毒を受けて收容所に收容された。

収容所では、引揚げに伴う事務手続きが行われ、ここまで着てきた衣服を脱ぎ、新しく支給された衣類に着替え、さっぱりとした。毛布各一枚も支給された。ごった返していて芋を洗うような風呂にも少しだけ入ることができた。

最後に、各自がそれぞれ帰郷する駅までの乗車券と、それに応ずる日数の外食券を渡されてすべての手続きが終わった。後は汽車に乗るだけとなって佐世保での最後の夜を過ごした。収容所には、四日間世話になった。

昭和二十一年十二月十六日、長崎県の南風崎駅から汽車に乗った。

車窓から見える松の緑、そして懐かしいかわらぶきの家並み、やっと日本に帰ってきた実感を味わったが、そのうちに広島に差しかかる辺りからの窓外の変わりよう、戦争の恐ろしさを再びこの目で見た。ぎつしりと詰め込まれた満員の車内からの声は意外と静かであった。各人が様々な思いをあたためているせいだろうか。

やつとのことで大阪駅に着いた。駅前のやみ市の活況、地下道には多くの浮浪児。どういう世の中になっているのか、すぐには理解できなかった。

十七日の夕暮れ近くになって、東成区東小橋の我が家に着いた。懐かしさに大声をあげて玄関の戸を開けた。しかし、母の声は無かった。家主がきて母の死を知らされた。一人しかない姉の所在も生死も分からないとのことを話してくれた。

母は、二十一年一月十八日に死亡したと聞きあ然として、大きく息をのんだ。その日は安東にてあの悲惨な、五番通り事件の騒ぎのあったときだ。

仏前に手を合わせ涙を流す。母が待っているからという心の支えで今日まで苦勞に苦勞を重ねても帰ってきたのに、心の張りがぶつんと切れてしまった。

情けない思いで数日、ぼんやりとして過ごしていた。虚脱感が体を駆け巡っていた。

間もなく市の交通局に採用されて働くようになった。路面電車から地下鉄へと変わった市内電車の運転手をやり、最後は駅助役となり昭和五十九年に定年と

なつたが、その後も働き続け、六十三年に辞めた。

昭和六十年に、安東市訪問を主とする旅行団の一人として、安東、奉天、大連などを訪ねた。その後も機会を得ては中国を訪問し現在まで八回になる。

今は、よい経験だったと思つている。そして幾度か残酷な場に遭遇したり無情な思いを味わつたりしたが、すべて戦争がもたらした災禍であると思つている。

世界から戦争という愚を無くして、永久平和の来る日が一日も早いことを願つている。

## 敗戦国難民の記

京都府 天 沼 明 子

はじめに

ソ連軍が突如ソ満国境を越境、満州に侵入した時、

関東軍関係家族にはいち早く避難命令が出されたので、私たちは北朝鮮平壤に向かいました。しかし、四日目に終戦となり、約一年間敗戦国難民として、そこで過ごしました。

北朝鮮独立記念日までに平壤を脱出すべく、数人のグループで徒歩にて、公道は歩くことができないので、山、河を越え、十日かけて三十八度線を越え、韓国の開城にやつとの思いでたどり着きました。米軍難民收容キャンプに入り、二日後、釜山港に貨車で運ばれ、米軍艦リバティ号にて博多に到着。敗戦国民の旅は終わりました。

あれから五十余年、年月の流れは早いもので、通り過ぎた地名、踏破距離は今も忘却の彼方へと去り、わずかに残る記憶の糸を手繰りながら、当時のことを記してみたいと思います。

渡満

父は現東大医学部皮膚科医師として診療、研究に携わっておりましたが、旧満州奉天南満医学堂からの要請により、一家九人とお手伝い二人と共に奉天の地に